

## 観光学研究科修士課程設立記念シンポジウムの開会にあたって

本シンポジウムの開催にあたりまして、国会も次年度予算編成の変則的な展開のなかで駆けつけてくださいました文部科学省法人支援課の田頭課長補佐に御礼もうしあげます。

本日のシンポジウムは、スピーカーとして、本学において観光学研究科設置を中心的に担った大橋元観光学部長、そして東京大学教授の西村幸夫先生、京都大学の西阪昇理事をお迎えしております。大橋先生は、本学観光学部設立に学部長として先頭に立たれ、大学院修士課程設立にも多大な尽力をされました。西村幸夫先生には、東京大学での本務（本年四月からは東京大学副学長にも併任されご活躍でございます）とあわせて本学観光学部客員教授をお引き上いただき、本研究科の設置に多大なご助力をいただきました。とくに本日は集中講義のために来学されました機会にこのシンポジウムにご参加いただきました。お疲れのところ申し訳なく、また深く感謝申し上げます。西阪昇さんは、もともと文部科学省でご活躍の方でございますが、丁度本学が観光学部設置の作業過程にある時期に、国土交通省に観光担当審議官として出向され、本学観光学部設置にあたりご助言ご助力をいただきました。今回丁度、京都大学理事として在任されているということもあり、多忙な本務の時間をさいて本日ご参加いただきました。西阪さんは、和歌山に近い大阪府の南部泉南は田尻町のご出身であり、和歌山との御縁も深いわけであります。感謝申し上げますとともに、今後ともご助力をお願いする次第です。

さて観光学研究科の設置の意味、および観光学研究の課題や方法については、のちにご専門の立場からお話しがございませぬので、私からはお話しするまでもございませぬ。

ただ一言、3・11後の高等教育機関、学術研究機関の責任ということにふれておきたいと思ひます。本日は3・11震災から丁度5ヶ月の日でもありますが、今回の事態を直面するなかで、改めて考えますことは、学問的良心と勇氣ということについてであります。

東日本大震災復興構想会議が6月25日に提出した「復興への提言～悲慘のなかの希望～」を、みなさんお読みになりましたか。その冒頭には「破壊は前ぶれもなくやってきた」とあります。しかしこれは正確ではありません。なぜなら少数者であることを恐れず学術的良心をかけて「前ぶれ」を警告してきた研究者がいたのですから。私は、彼らの勇気と学問的良心に敬意を払うことなくして、復興にかかわる発言はありえず、また3・11後世代の教育を担いことはできないのではないかと思います。

私は、こうした観点からの議論が、アカデミー・大学のなかで、しっかりおこなわれなければ、学問、科学、技術は市民的信頼を、さらに失うと思います。すでに本学では、7月の教育研究評議会において、この観点からの自由討論を行いました。本学においては、さまざまな機会に、3・11の意味および3・11後の学術教育のあり方について議論を深め、研究者の倫理、使命について考え続けたいと思っております。

観光学は、とりわけ市民および地域との関係の深い学問として発展するはずであります。その意味で、ひとこと述べさせていただきました。和歌山大学は、現在修士課程のスタートをふまえ、日本の観光学研究と教育の発展、とりわけ私立大学を含めた観光学部設置、観光学教育の進展と協働し、それを国立大学として支える役割を果たすべく、博士課程の設置の構想も議論しております。その意味で本日のシンポジウムが、日本の観光学研究と教育の発展に資するものとなることを願っております。どうもご清聴ありがとうございました。